

東京都江戸東京博物館紀要 第5号 2015年3月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 5, P. 1-32, March, 2015

江戸城二丸御殿

畑 尚子*

目次

- はじめに
1. 元治度二丸御表大奥共総切絵図
 2. 最後の二丸御殿の居住者
 3. 江戸城における二丸の役割
- 二丸に居住した人々 -
 4. 現存する二丸図
- おわりに

キーワード 江戸城 二丸 天璋院 本寿院 徳川家重 お美代

はじめに

「元治度二丸御表大奥共総切絵図」（資料番号10200110～128）は以前、私が『幕末の大奥 天璋院と薩摩藩¹⁾』で紹介した資料で、その後江戸東京博物館が古書店より当資料を購入した。旧所蔵者や伝来などは不明であるが、袋と題箋に蔵書印が押されている。

標題に「切絵図」とあるように、一枚の大きな図面ではない。江戸城の図面は普請する部署が異なることから、表向（表・中奥図）と奥向（大奥図）に分けられ、平面図は全体を網羅するものと特定の場所の詳細図がある。つなぎ合わせると一枚の大きな図面になる切絵図の形態は珍しいといえる。

本丸や西丸の場合は再建時の図面が数多く残されており、時代が下がるにつれて現存数も増える。これは当然の結果といえる。しかし、一方で二丸図は近世前期の寛永期の図面しか残っていない。図面に年代が墨書されている訳でなく、研究者が記載内容を検討して年代を推定したものである。著者はかつてこの年代推定に疑義を提示したが、今回さらに掘り下げて検討してみたい。

さらに、二丸に誰が暮らしたかを解明して、江戸城内での二丸御殿の役割にも目を向けたい。

江戸城の二丸御殿は二之丸・二ノ丸と「の」を付けて表記する例が多いが、本稿では史料の原題が「二丸」となっていることから、「の」を付けない表記とした。

1. 元治度二丸御表大奥共総切絵図

本図は文久3年(1863)11月15日に焼失した二丸御殿が、慶応元年(1865)4月29日に再建されたときの図面である。元治度とあることから、この図面は元治元年(1864)2月20日から、同2年(1865)4月6日の間に作成され、建築のために使用されたと推察できる(4月7日に慶応と改元)。新造の二丸には13代将軍徳川家定の御台所天璋院と同生母本寿院が移徙することが決まっており、2人の住まいを基軸とした構造になっている。

本図は18枚の切絵図からなり、つなぎ合わせると1枚の大きな絵図になる(【口絵6】参照)。まずは1枚ずつ丹念に見ながら、併せてつなぎ目も確認していきたい。

(1) 御書院遠侍部屋々之絵図

表玄関の式台を上がると、東に玄関番、西に当番所の部屋がある。遠侍の間が正面にあるのはどの御殿でも同様である。他の二丸図では雨落ちを挟んで遠侍の間と御三之間、上段・下段がコの字型に配されているが、本図では右側に延びて御三之間・御次・御上之間と横一列に並んでいる。元治度二丸御殿の主は天璋院をはじめとした女性であることから、老中や若年寄の詰所はないが、「海陸御備向掛御用方」の部屋があるのが幕末期の図面であることを克明に物語っている。他に目付部屋、火之番詰所、中之口番詰所などがある。しかし、他図にみられる能舞台は設置されていない。

式台から向かって西側には御徒士部屋・坊主部屋・陸尺部屋・中之口門、番所、御長屋御門が連なっていて白鳥堀まで延びている。

本図から延びる廊下は2本で、御上之間の入側から延びている廊下は(2)図に、目付部屋の横の廊下は(3)図に繋がる。

(2) 中奥御休息御小座鋪向絵図

中奥は藩邸などでは当主の居住スペースに当たる。江戸城本丸御殿では將軍のプライベート空間と執務スペースを合わせた表と大奥の間の領域を従来中奥と呼んでいたが、深井雅海氏は史料に基づき奥と呼ぶ方が適切であると提案した²⁾。これを受けて著者は中奥と奥の違いについて藩邸の図面を駆使して考察し、中奥という言葉の定義を試みた³⁾。そこで、大名の江戸屋敷は御殿向が3分割される場合、江戸城本丸御殿のように表・奥・大奥と分かれるパターンと、表・中奥・奥に分かれるパターンがあることを導き出した。大藩に前者の例が多く、執務空間の機能が充実しているかに違いがある。

上記の定義からも二丸のこの空間は中奥と称されるのが適当であり、実際に中奥という名称が付けられている。但し、藩邸図では中奥とある場合は、女性主や奥女中が暮らす奥向を単に奥と称する例が多いが、江戸城二丸の奥向は本図の標題や『東京市史稿』(「二之丸大奥化粧間四季大和山水」)からもわかるように、大奥と呼ばれていた。

本図には中奥の内、主が寛ぐスペースである御休息・御小座敷、主が使用する湯殿、その衣装を納める納戸、近臣の者が詰める溜が描かれている。もっとも、この時期二丸に住まう男性主は存在しないので、14代將軍家茂が訪れたときに使用することを想定したものと思われるが、後に違う用途で使われることになる。

本図からは2本の廊下が上下に延びており、下の廊下は表向とつながり、その境には御錠口がある。上の廊下は松御殿へ向かうもので、先に御鈴口がある。北側の三重線は表向と奥向を区切る銅塀である。

（3）中奥御次向部屋々之絵図

本図が（2）図の西側に位置することは、御用部屋や間取りが重複して描かれていることから明白である。

御用部屋は本丸においては老中・若年寄の執務室に当たり上下に分かれるが、ここでは2部屋が同じ造りとなっている。表との境に位置するところに時計之間があり、その近くに御御衆の詰所と奥右筆所があり、簡単な執務が行える部屋割りとなっている。しかし、実際に老中が詰めていたわけではなく、必要ときに使用できるよう備えて置いたと捉えるのが妥当であろう。この時期、家茂は上方に滞在することが多く江戸城を留守にしがちである。天璋院が老中の登城を促すなど政務にも関わっており、老中らが二丸の天璋院の元へも伺候することも想定して作られたのかもしれない。

他に特に用途を限定しない奥向部屋、談部屋と、料理を準備する御膳建・御茶部屋・御手水部屋などがある。玄関を備えており中奥へ直接出入りするものが可能となっている。

（4）御納戸口御門絵図・（5）御風呂屋口御門絵図

本丸御殿や宝暦10年（1760）二丸図では中奥玄関から出入りする門は風呂屋口門と名称が付けられており、その理屈からいえば（3）図の玄関に続くのは（5）図となる可能性が高い。両図とも門の脇に門番所を備えており、下水が外側にある。（4）図は便所を3個備えており、（1）図の塀より続く所に位置すると思われる（p16区分図参照）。

（6）松御殿御化粧之間絵図

天璋院の御殿である松御殿の平面図である。正室の御殿には梅御殿・柏御殿・新御殿など吉祥を著す漢字などが付けられ、主をその御殿名で呼ぶこともある。11代將軍家斉の御台所で、同じく薩摩出身の広大院の住まいも松御殿と呼ばれた。

小さな庭である中坪を挟んで、東側に化粧之間と御次が、西側には上段・下段・休息・二之間・三之間・御台子之間（茶道具が置かれ、茶菓を調進するところ）がある。台子之間の隣が老女の詰所で、この時天璋院付老女であった梅溪・ちえ・つばね（幾島）・藤崎・瀧井が当番でここに詰めていたといえる。御溜は老女以外の女中が待機するために使われたと推察できる。

北側には天璋院専用の湯殿・上り場・便所・御納戸が設けられている。南側には御清之間があり神棚が備えられている。神棚と仏壇両方が置かれるのが一般的であるが、本図では3ヶ所とも神棚となっており、記載ミスの可能性も考えられる。天璋院はこの部屋で徳川家の先祖代々の霊や家定の位牌に手を合わせたのであろう。

（7）御鈴口御納戸向絵図

本図が（6）図の北側に位置することは、御清之間とその隣の御溜が重複して描かれていることから明白である。

御溜から中奥との境へ延びる廊下はかぎ型になっており、その角に巨大な2階建ての納戸があり、廊下の端が御鈴口となっており、（2）図の御鈴口と重なる。この納戸にも天璋院の衣装が納められて

いたのだろう。毎年、暮には御納戸払が行われ、奥女中たちに衣装が下賜された。元治元年の御納戸払では、瀧山は天璋院から「黒縮緬惣御縫入御袴、晒御紋裾御模様桃色御相召 萌黄御縫御帯」を頂⁴戴している。

2階の図面が付いているのは本図のみであるが、長局も2階建であったことが記録されている。ピンク色（【口絵6】参照）になっている箇所すべてが2階建かは検証の必要がある。

(8) 松御殿御膳所絵図

松御殿御膳所とあるように天璋院専用の膳所であり、(6)図の西側に連なる。(6)図の入側を挟んで溜と膳部を整える御附建の間がある。膳所は2ヶ所あり、1ヶ所には仲居の詰所が、もう1ヶ所には御末の詰所が隣接している。イロリのある部屋と渡縁は板の間で、渡縁には井戸がある。イロリの間の脇が出仕廊下（奥女中が長局から仕事先である御殿向に向かう廊下）で、便所が9室も並んで設置されている。出仕廊下の北側から西へ延びる廊下は(16)図の御半下部屋に繋がっている。

(9) 本寿院様御住居・御祐筆間・呉服之間・御広座鋪絵図

本図には本寿院の住居向とその膳所、並びに各女中の詰所が内包されている。本寿院の住まいは上之間と御次、入側を挟んだ八畳之御間から成り、天璋院の住まいと比較するとかなりコンパクトになっている。もっとも天璋院の住まいは御殿、本寿院の住まいは住居と呼ぶところからも格の違いを表わしている。八畳之御間は寝所として使用したのではないかと推察できる。本寿院専用の湯殿と上り場・便所及び御清之間が備わっている。本寿院の御清之間にも仏壇はなく、神棚が3基据えつけられている。

住居に隣接する御溜には老女詰所等の名称はないが、本寿院付老女や世話をする中藪などが詰所として使用したと考えられる。本寿院の納戸と膳部を整える御調建、狭いながらも専用の膳所と仲居の詰所、イロリと井戸を備えている。

図の西側が女中たちの詰所、働くスペースとなっており、表使詰所・御広座敷詰所・御仲居詰所・御末詰所・御祐筆間・呉服之間がある。御広敷に向かう廊下に面した所に、男性役人と対面するためなどに使用される御広座敷が位置し、その入り口には出入りを監視する番部屋が置かれている。

本図は(8)図の南側に面する。

(10) 御広敷御玄関并部屋之絵図

玄関前の式台が大きく取られていて、駕籠での出入りがし易いように作られている。役人たちの出入り口である中之口がその脇に付けられている。式台隣の煉土之間には下御広敷御門が付けられ、ここからも出入りが可能で、下男詰所に直接行けるようになっている。玄関と廊下を挟んで奥医師の詰所である御医師部屋があり、玄関を抜けたところは進上と書かれた巨大な部屋となっている。ここは諸大名などから天璋院・本寿院への進上物が一時的に置かれた場所と考えられる。下広敷の隣が大奥を警備する伊賀者の休息所である。伊賀者は御錠口や七ツ口の警備が担当であり、御錠口がある部屋が勤務場所として示されている。

南側が広敷役人の詰所となっている。広敷役人には広敷用人を頭とする事務処理系と、広敷番之頭を頭とする警備・監察系の2系統がある。事務系は用人の下に用達・侍・御用部屋書役・吟味役が置かれた。本丸では広敷用人は別名御台様用人と呼ばれるが、ここでの用人は天璋院付で、別に本寿院

付用人が存在し、事務系はすべて天璋院付と本寿院付が別々に置かれている。警備系は番之頭の下に添番・伊賀者が置かれるが、本図より番之頭にも書役が付属していることがわかる。

御錠口と書かれたところから延びる畳廊下と板廊下は、(9)の番部屋前の廊下に繋がり、伊賀勤番所と書かれたところから延びる廊下は(16)御半下部屋へ向い、本寿院様御用人部屋脇の廊下は(11)図の渡りに繋がる。

(11) 表御膳所絵図

御広敷部屋の西側に位置する。御膳所に井戸はあるがイロリは置かれていない。竈の印はないが、四角に2本短い線が付けられているのは何を意味のであろうか。湯殿と同じように板敷に横棒がある場所は、食材の洗い場として使用されたと考えられる。他に御台所頭部屋と小間遣組頭の部屋、陸尺世話役・陸尺頭の部屋がある。本丸御殿の表膳所と奥向膳所の役割分けについて、一般的には表膳所で食材を調達して、調理まで行い、奥向の膳所では温めて配膳をするだけといわれているが、確証があるわけではない。本図では松御殿膳所の機能もかなり充実しており、どのような役割分けがなされていたかは不明である。

(12) 拾八部屋長局絵図・(13) 七部屋長局絵図・(14) 六部屋長局絵図

この3図が一番北側に位置し、東側から(12)(13)(14)と順に並ぶ。(12)拾八部屋長局は間口の違いから、二間部屋8部屋、二間半部屋5部屋、四間部屋2部屋、三間部屋3部屋にわかれる(p26の書き起こし図では、原図に忠実にトレースしたため、二間半部屋の間口が均一でない)。廊下から部屋の中に入ると手前から奥に向かい縁座敷、上之間、相之間、渡り、多門と続き、さらに廊下を挟んで物置、湯殿、便所、裏部屋がある。井戸は2つあり共同で使うようになっている。拾八部屋長局より延びる廊下は(8)松御殿御膳所へ繋がる。

(13)七部屋長局では、相之間が次之間という名称に替わり、奥行きが2間半になっているのを除き、拾八部屋長局と同じ造りである。間口はすべて同一で2間である。(12)図と(13)図の境の廊下は(16)御半下部屋の前の廊下に繋がる。

(14)六部屋長局は渡りと多門が板の間になっている。また、上之間と湯殿のある空間の奥行きが、(12)図や(13)図より短くなっており、全体的に部屋が小さくなっている。(13)図と(14)図の境の廊下は三部屋長局の前の廊下に繋がる。

本丸長局は一之側から四之側まであり、一之側右側から職制の高い者が入る仕組みとなっている。二丸御殿では3図を比較すると、東側から西側に進むにつれ部屋の格が下がって行くのがわかる。その居住者については2章で考察したい。

(15) 三部屋長局絵図

この絵図面のみ題箋がはがれていて、後筆で「四部屋長局絵図」と書かれているが、実際は3部屋しかなく、(16)御半下部屋絵図にも「三部屋長局之方」と記載されていることから、標題を「三部屋長局絵図」とするのが妥当といえる。この3部屋は御半下を除いた御仲居・火之番・御使番ら職制が下の女中が住まう長局と捉えることができる。本丸御殿では七ツ口は御半下部屋近くに設置されているが、二丸御殿ではこの三部屋長局の西端に位置している。七ツ口から出入りするの奥女中の使用

人である部屋方女中で、男性使用人である五菜もこの口を利用したといわれる。七ツ口の脇に裏判所と貫目番所が置かれている。

(16) 御半下部屋絵図

御半下部屋は大部屋となっており、2部屋ある。大きな板の間が続いているが用途は不明である。押入・物置・湯殿・便所は共同使用となっている。

東側は(8)松御殿御膳所に面し出仕廊下が重複して描かれている。南側に御広敷の方と書き込みがあり、廊下が延びている。

(17) 御広舗御長屋五菜腰掛絵図

御広敷御門の長屋と五菜腰掛を描く。門の中心から北側に御門番所・御仕事部屋・御小人部屋・本寿院様仕丁部屋・仕丁部屋と連なり、南側には釜屋・釜屋之者詰所・奥火之番・御水製所がある。南側の機能は本丸の御広敷門には見られないもので、何の為にあるのか今後考察する必要がある。

五菜は奥女中各自が雇った男性使用人で、買い物や実家との手紙のやり取りなどの使いが主な仕事であった。この腰掛は五菜の待合として利用された。仕丁は力仕事など雑役に従事する者で、天璋院付と本寿院付に分れている。

(18) 御多門造御土蔵絵図

幅3間縦15間の土蔵で入口が両端にあり、窓が9個つけられている。「式棟御出来」とあることから、このような土蔵が2棟造られたことがわかる。

次に全体を俯瞰すると、表はいたって狭小で、表向(表・中奥)に膳所がないことが指摘できる。2人の主が女性であることから、大奥が中心となった構造といえる。表向と大奥との境は銅堀で仕切られていて、1本の御鈴廊下が2つの空間を結びつけている。繋げてみて分かったことは、本寿院住居の「八畳之御間」脇の廊下は松御殿の入側に接続していて、ここが杉戸で仕切られていれば行き来が可能になる。切絵図からはこのような場所が壁か杉戸か唐紙かは判断できない。松御殿と本寿院住居の南側には庭となるスペースがある。また、五菜腰掛と七ツ口との距離は意外と近く、御広敷と長局(職制が低い女中の部屋)・御広座敷を結ぶ廊下も短く、男性役人と女中との接触も容易に思われる。

2. 最後の二丸御殿の居住者

文久3年(1863)6月3日に西丸、同年11月15日に本丸と二丸が焼失したことにより、江戸城内に御殿が存在しないという非常事態となった。家茂と和宮は田安邸に、天璋院と本寿院は清水邸に仮住まいした。元治元年(1864)7月1日西丸が竣工して家茂と和宮が移徙した。その2日後の3日に幕府は天璋院の住まいとするべく二丸を造営することを触れた。慶応元年(1865)4月29日に天璋院が先に二丸に移徙し、5月3日に本寿院が引き移った。

近江国堅田村の庄屋錦織五兵衛が江戸城の中に入り大奥を見学したことは、氏家幹人氏が驚きの事実として紹介している⁵⁾。それは、天璋院が引き移る4日前の4月25日のことで、五兵衛は完成した二

丸御殿を見学しており、その模様を「東武日記」⁶⁾に記している。少し長くなるが諸門を通り大奥に入ったところから引用して、図面と対比させながら見ていきたい。

七ツ口ト云御張紙アリ。此処広キ御玄関ナリ。女中衆十人斗り遊フ。此前ニ供彼有。女中ノ御乗物并釣台等多シ。右ノ七ツ口ヨリ麻裏草履ニテ何ノ苦モナク昇殿ノ人多シ。五兵衛事恐レ恐レ履物ノ儘昇進ス。女中方御居間口毎二名前ヲ書三四人様宛張紙アリ。御楼下三筋アリ。長サ五十間三十間斗難分り巾ハ壺間半斗り縁ダレニテ張ル。此楼下右ノ方女中衆ノ御部屋斗りナリ。其上ハ惣二階ナリ。手スリ附キノ二階ニ縁アリ。仰テ拝見ス。右御部屋ハ南側ナリ。中通り右ノ楼下同北側ハ御湯殿ナリ。御女中御一部屋毎ニ御湯殿壺ケ所宛アリ。美々敷事限りナシ。此御部屋西ヨリ中程ニ御部屋ノ口ニ

「御つほね・そて・つゆ」如此張紙アリ

右御部屋ノ御障子ヲ高野老人押開キ入りテ見レバ、向フ御座敷ニ御老君ノ御女中兩人アリ。右高野氏風呂敷ノ中ニ携タル釜一ツ差出シ、御届ケ申上ル。則右ノ御老女ヨリ外御部屋并御殿向キ拝見ヲ免シ玉フ。難有恐レ入りテ御座敷始メ御二階ニ至ル迄処々拝見ス。天井裏等惣白紙亦是は紋紙ヲ以張付広キ処ニハ釣棚多シ。猶、老女様ヨリ差図ニテ追々東ノ方江至ルニ猶々上々ノ御部屋ナリ。実ニ縮入ル斗ナリ。西ノ方ヨリ続キ ○一番静行院様○二番目失念ス○三番秋月院様○四番妙好院様○五番豊儉院様（「此御方東ヨリ第一番ナリ。」）ニテ御部屋東ノ方終り也。

是ヨリ此御楼下ヲ地上江下り、猶南ノ方江廻り行キテ恐レ恐レ西ノ方ヲ覗テ拝見ス。右ノ御五院方ノ御庭先キナリ。悉ク御新作ニテ御綺麗ノ御事ナリ。猶南ノ方ヲ仰テ大三階建ノ御殿向キ惣白木造広大ノ御建物ナリ。^(天璋院)是則天正院様御移り被遊候処ノ新御殿也ト云。

先ず(15)図の「七ツ口」に到達すると、玄関の脇で遊んでいる女中たちや、駕籠や釣台などの乗り物を横目で見ながら、履物をはいたまま御殿に上がる。女中たちは天璋院の移徙前にすでに引き移ってきており、そのため入口には乗物がたくさんあったのだろう。

女中の部屋の前には3、4人づつ名前が書かれた貼り紙があり、自分がどの部屋に入ればいいのかわかるようになっている。名前の貼り紙は慣れれば剥がすのだろう。すべて2階建てであるが2階には上がらず、下から仰ぎ見る。五兵衛はさらに奥に入り、湯殿と部屋との境の廊下から各部屋に湯殿があることを確認する。

その後、五兵衛は拾八部屋長局の廊下を西から東に向かって進み、その中程に「御つほね・そて・つゆ」と貼り紙がある部屋に入る。前章でも述べたようにつほね（局）は天璋院付老女で幾島ともいい、薩摩藩邸より天璋院に付き従って江戸城に入った女中の一人である。つゆは中藤でそては御小性である。本丸長局に居住していた時は、つほねは島津家家臣の娘と相部屋になっているが、この2人は旗本の娘である。天璋院付老女は5人いることから、拾八部屋長局のうち5部屋ある二間半部屋を割り当てられたと勘案でき、つほねは3番目の順位であることから真ん中の部屋と推定される。しかし、一方でこの長局には本寿院付女中も入ることから、上記のように断定することはできない。元治元年の天璋院付女中は78人、本寿院付は51人である。

五兵衛は「高野老人」の伝手で、見学を許されている。高野氏は薩摩藩島津家の老女小の嶋に縁の

人物と勘案できる。小の嶋は享和3年(1803)江戸青山に生まれた。父は高野理左衛門で、母は間宮氏、文政元年(1818)16歳で薩摩藩邸に奉公に上がったことが、妙縁寺(墨田区)の小の嶋墓碑銘に刻まれている。小の嶋とつぼねは共に島津家に仕えた仲間であり、小の嶋の実家からの依頼ということで見学を許可したと推察できる。

高野氏が手渡した釜の中に金銭が入れられていたかはわからないが、つぼねより長局の部屋と御殿向の拝見を許可された五兵衛は、つぼねの部屋を座敷から2階まで見学する。

つぼねの部屋から東の方へ行くと、さらに身分が上の人たちの部屋があり、家斉・家慶・家定の5人の側室の名前が貼られている。西から順に静行院(家斉側室美代、美代の院号としては他に真行院・専行院がある)、五兵衛が失念した2番目が瑞華院(家慶側室はな)、秋月院(同つゆ)、妙好院(同よき)と続き、東の端が豊儉院(家定側室しが)である。つまり、静行院と瑞華院が四間部屋で他の3人が三間部屋となる。この廊下から地上に下りて南の方へ廻ると5人の庭があり、すべて新作で美しいことは限りないと五兵衛は述べているが、図面からは庭の様子はうかがい知れない。さらに南を仰ぐと、天璋院が移る白木造りで3階建ての広大な建物が見える。五兵衛はさすがに天璋院の御殿に入ることはできず、仰ぎ見るだけである。

慶応2年(1866)12月14日、14代将軍家茂生母実成院が二丸に移居した。家茂が同年7月に死去したことによると考えられる。留守居跡部良弼から若年寄京極高富へ差し出した書付に次のようにある。

実成院様御機嫌能只今二丸大奥江被為入候、依之申上候、以上

十二月十四日 跡部遠江守

京極主膳正様

(「実成院様二丸大奥江被為入候段申上候書付」国立公文書館蔵)

また、高野伊予正から薩摩藩老女花川へ送った書状から、この実成院の移居にも高野氏関わっていたことが見て取られる。高野伊予正と高野老人が同一人物かは定かではないが、高野伊予正は方位などの占いを生業とする人物であったと思われる。実成院の二丸移居に際する方災除を依頼したのはつぼねであり、西丸から移居すると二丸は甲きのえの方角に当たることから、実成院の住居となる所の柱に「火難除の歌」を貼るのがよいと認めている。

これに先立ち、実成院が二丸へ移居することが決まった10月28日、幕府は二丸中奥の模様替えと長局の普請を命じた。本寿院の住まいを当時使用していなかった中奥に移し、元の住居を実成院へ引き渡すためである。

御留守居江

来ル十一日、本寿院様二丸中奥江御移替可被遊処、御都合も有之、来ル十九日御移替可被遊旨猶被仰出候間、為心得此段相達候事

(「本寿院様二丸中奥江御移替二付可達趣」国立公文書館蔵)

実成院が12月14日に移居しているので、本寿院が中奥に移ったのは11月19日と考えられる。中奥が本寿院の住まいとして改築された図面は残っていないが、(2) 図の空間が本寿院の住居スペースとなっ

たであろうことは、容易に推察できる。

慶応3年12月23日、折角新造された二丸御殿は再び炎上、焼失してしまう。天璋院・本寿院・実成院は吹上御庭に立退き西丸へ入り、そのまま西丸を住まいとして江戸城開城を迎えることとなる。

3. 江戸城における二丸の役割—二丸に居住した人々—

さて、江戸城築城の内、御殿の造営は本丸より順次行われ、二丸に御殿が初めて造営されたのは寛永13年（1636）6月21日のことである。この時の図面とされるのが「二之御丸御指図」（東京国立博物館資料館2447）・「二之丸御指図」（東京都公文書館蔵ZB-11-131）と内藤昌氏が書き起こした『寛永期江戸城本丸・二丸図』である。東照宮が御殿北西部にあり、御殿全体は大名の江戸下屋敷のように遊興性が強いのがその特徴といえる。

寛永18年に幕府は二丸御殿の改築に着手したが、江戸市街の火事によって中断し、寛永20年に至って世子竹千代（家綱）の御殿として改築されることとなった。同時に三の丸御殿も造られ、三の丸は7月12日に新造となり、二丸は同月25日に改築が成り、竹千代（正保元年家綱と改名）が引き移った。この時の図面とされるのが国立公文書館が所持する複数の二丸図であるが、この検討は次章に譲りたい。その7年後の慶安3年（1650）9月20日、家綱は西丸へ移徙する。

明暦3年（1657）1月19日に発生した明暦の大火で、本丸御殿と共に二丸御殿も焼失した。この時、二丸御殿の作事と並行して石垣普請もはじめられ、本丸の台所前北方より二丸の堀を埋めて本丸を東へ拡張する工事を行い、本丸から二の丸への降りる口を汐見坂と名付けた。明暦大火後の二丸御殿は新造ではなく移築という形がとられた。明暦3年月27日越谷行殿が移築され、延宝9年（1681）9月11日には神田行殿が移築された。

正徳6年（享保元年・1716）4月、7代将軍家継の後嗣となった吉宗は一旦二丸に入り、本丸に移り、8月13日将軍宣下を受ける。8月4日吉宗の長子長福丸（家重）は二丸へ移る。この時、正徳元年生まれの長福丸はすでに6歳となっていたが、吉宗の世継ぎとして承認されておらず、将軍世子の立場ではない。享保9年11月長福丸は漸く吉宗の世子となり、12月家重と諱を賜り、翌10年6月19日晴れて西丸へ移徙する。

若干遡るが、享保元年に西丸の改築工事が行われ、6代将軍家宣御台所天英院が享保2年12月に引き移った。家重が西丸へ移徙した時、西丸大奥には天英院が居り、2人はしばらく、奥と表ではあるが同じ郭内に住むこととなる。享保16年（1731）家重と婚姻した培子（伏見宮邦永親王娘）が江戸城西丸へ入ることにより、天英院は同年9月22日二丸へ移徙し、死去する寛保元年（1741）2月28日まで居住した。

それから数ヶ月後の同年6月、家重側室で家治生母お幸（至心院・梅溪通条娘）が二丸へ引き移り、延享4年（1747）4月16日に二丸御殿が焼失するまで居住した。火災前日の15日まで生母の元を訪れていた家治が二丸に逗留しており、危ういことであったと記録にある。お幸は翌5年2月26日に死去することから、この時すでに体調を崩しており、家治は見舞いを兼ねて二丸に逗留していたと思われる。

火災後お幸は家重の住む本丸へ引き移ったと推察できる。お幸が同じく家重側室で清水重好生母安祥院と不仲であったと伝えられることが、家重の生前にもかかわらず二丸へ引き移った理由の一つと考えられる。

お幸の二丸居住がその後の側室（特に將軍や世子の生母）の二丸居住の先例となった。

延享4年4月16日に焼失した二丸御殿は宝暦10年（1760）5月13日に新造されるまで13年間造られなかった。宝暦9年9月19日、家重が將軍職を退くことを発表したのを受けて、二丸の造営が始まったと『東京市史稿 皇城編』にある。家重の隠居から二丸移徙までの様子を一橋宗尹の実録『覚了院様御実録』⁹⁾より見ていきたい。

宝暦10年4月1日 家重は隠居し政務を家治へ譲り渡す旨が公にされた。

公方様年来 御病身ニ被為 入候ニ付、未御老年ニ者不被為 在候得共 右大将様江御政務被遊 御讓 御本丸江近々被為 移候 公方様被遊 御隠居、西丸江可成 御移候（句点筆者）

この時点では家重の隠居先は、一般的な大御所の隠居場所である西丸と見られている。5月1日に、来る13日に家重と家治・御簾中との移替が行われることが発表され、5月3日大御所家重の二丸止宿が触れられた。

御移替以後 大御所様、二丸被遊御止宿、献上物之儀者都而西丸江差上候得共、^(一橋宗尹)刑部卿殿、^(一橋治済)豊之助殿より何茂使其外惣而女使之分者、二丸江被差上候様、可被相心得候（句点筆者）

止宿とは仮住まいという意味合いであり、献上物は西丸へ差し上げ、宗尹や豊之助からの使者は女使も含め二丸へ差し上げるようにという指示である。5月13日移替当日大御所家重は田安宗武、一橋宗尹、清水重好に見送られ二丸へ引き移った。『覚了院様御実録』の宝暦9年9月19日条には二丸再建に関する記載はないため、『東京市史稿 皇城編』にある家重の隠居所として造営を開始したという内容を確認することはできない。実録からは、本来西丸に移徙すべきところ、直前に二丸に変更したようにとれるが、このような重大なことが簡単に変更できるわけもなく、御殿も家重用に最初から建築されており、二丸へ行くことは内々には確定していたが、大御所の隠居場所は規定上西丸であるので、このような形式を踏んだのではないかと推察できる。二丸移徙は家重の強い意志であったといえるが、何故家重が二丸に拘ったかは詳らかにはできなかった。

宝暦11年6月12日に家重が逝去すると二丸御殿はまた暫く主不在となる。国文学研究資料館に「於二丸 蓮光院様江献上物之節絵図面 天明六丙午年十一月二日 戸田采女正様御番中忠順」と添え書きがある簡易な図面がある。このことから家治側室で家基生母蓮光院（お知保）が天明6年（1786）11月2日に二丸にいたことが判明した。寛政元年頃、老女瀧川は小納戸を解任された弟の武藤安貞を、蓮光院が住む二丸に勤務させたいと松平定信に願ったが拒否されたと高澤憲治氏は述べている。¹⁰⁾これらのことから蓮光院が二丸に居住していたのは確実で、おそらくは家治死去した天明6年8月以降に移居し、寛政3年（1791）3月8日に死去するまで暮らしていたと推察できる。

家慶生母お楽が死去した文化7年（1810）5月20日付の「おらく御方死去ニ付御留守居二丸泊書拔」（国立公文書館蔵）という標題の書付がある。この史料からはお楽が二丸に住んでいたことを立証することはできないが、可能性は残されている。

天保期は家斉や家慶の息子たちが養子に入る前のひと時を過ごす場所として利用されている。天保4年（1833）2月27日家斉息子千三郎（齊善→越前松平へ養子）は二丸へ引き移り、同6年9月25日に養子先の越前家上屋敷常盤橋邸へ引き移った。これにより空いた二丸御殿に9月27日家慶息子初之丞（慶昌→一橋家へ養子）が入る。初之丞は同8年5月4日一橋家の養子となることが決まり、同年8月11日養子先の一橋邸に引き移った。初之丞が住んでいた時、家慶が二丸に御成した図面「二丸御成之節御供勤方絵図」（国文学資料館寄託 久松家文書）が残されている。これによると、初之丞の住まいは御風呂屋口の近くの中奥にあったことがわかる。家慶が二丸の初之丞の元を訪ねた時期は不明である。

天保12年閏1月7日大御所家斉が逝去し、同年の3月頃家斉の側室たちが二丸へ移居した。

夫より中野様^{（中野石翁）}へ参候処、（中略）お美代様へも申述候。二之丸御下り可被成、御八人有之由御髪切可被成由。（『鷹見泉石日記』天保12年2月24日条）

家斉が死去した時の側室は、うた（宝池院）・てふ（速成院）・八重（皆善院）・美代（静行院）・いと（本輪院）・るり（青蓮院）の6人であり、8人とあるのは泉石の記載ミスといえる。

お美代については、天保12年10月に判決が出た智泉院事件に連座して、娘溶姫の嫁ぎ先である本郷の加賀藩邸、或いは寺院に蟄居したという俗説が一部で流布しているが、全くの虚偽であり、下記の史料からもお美代が二丸にいたことは明白である。

二丸久尾殿より千恵迎の者参り、急に上りくれ候様に申し越し候

（『関口日記』天保13年5月3日条）

久尾はお美代の部屋方女中で局（部屋方女中の取りまとめ役）という役職にあり、生麦村の名主関口藤右衛門の娘千恵もかつてお美代の部屋で働いていた。この時千恵はすでに実家に帰っていたが、久尾の要請で二丸のお美代の部屋へ手伝いに上がった。

文久3年（1863）7月から深川浄心寺で身延山久遠寺奥院祖師像の出開帳が行われた。開帳仏はその後江戸城大奥へも上がり、大奥女中とのやり取りが頻繁に行われた。静行院も久尾を通じて開帳を寿いだ。そこで、献上物が住職日琢より静行院に贈られた。

扱は当山奥院祖師并天拜七面宮来ル七月十九日の日数六十日之間ふか川於浄心寺開帳仕候ま、御吹聴申あけまいらせ候、右ニ付此一しな静行院様江献上仕候間、宜敷御取計御披露願あけ参らせ候、

（日琢書状久尾宛「奥院祖師江戸開帳御文之控」身延山久遠寺蔵）

上記の書状に引き続き具体的な献上物が記されており、そこに「二ノ御丸」への献上品とあり、静行院が二丸にいることを窺い知ることができる。

二ノ御丸	献上品数覚
「金銀水引掛ル」	
昆布包	上柳三十入
一柿折	壺通り
右静行院様江	
「白赤水引掛ル」	
昆布包	同 式十入
一柿折	壺通り
右久尾様江	
「同」	
昆布包	同断
一柿折	壺通り
「小石川春日町」	
谷津お松さま江	
右は静行院様久尾様江御届物	
相願候二付	
「谷津江相願候事」	

長寿で明治期まで生きたお美代を除き、他の5人の側室たちは順次死去し、二丸御殿を去っていった。天保14年(1843)3月に八重(皆善院)、天保15年にるり(青蓮院)、嘉永3年(1850)にいと(本輪院)、嘉永4年にうた(宝池院)・嘉永5年にてふ(速成院)が死去した。

一方で、嘉永6年6月家慶が逝去して、はな(瑞華院)・つゆ(秋月院)・よき(妙好院)が、移住したと考えられる。典拠はないが、慶応元年(1865)4月に二丸御殿に入っていることからの推察である。家慶側室の内こと(妙音院)は桜田御用屋敷に住んだと言われている。安政5年(1858)7月家定が逝去して、しが(豊儉院)が二丸へ移住した。

温恭院様元御中藪御客応答格豊儉院儀、温恭院様薨御ニ付摘髮被仰付二丸江被差置候処、此度御暇相願候旨別紙之通願出候趣を以相伺候処伺之通被仰出候得共、猶豊儉院儀ハ御側近江召仕候者ニ付、是迄ハ御暇等ニハ難相成者ニ付、矢張是迄之通、御宛行被下、二丸江被差置候方ニも可有御座哉(後略)(句点筆者)

(「伊賀殿江可申達趣」国立公文書館蔵)

上記の史料は、豊儉院が家定の逝去に伴い他の奥女中たちと同じように暇願いを出したため、その扱いをどうするか、奏者番板倉伊賀守勝静に伺いをたてた内容となっている。「御側近江召仕候者」であるため、暇は許されず二丸に差し置かれることとなった。豊儉院は家斉や家慶の側室たちのように子供を産んではいないが、寵愛を受けたということで同様の扱いであったことがわかる。

このように出入りはあるが天保12年からは、家斉・家慶・家定の側室たちが二丸御殿を住まいとするようになるが、元治度切絵図からもわかるように彼女らの居住スペースは長局であり、御殿の主とは呼べない。

文久元年(1861)9月25日、本寿院の二丸引き移りにより、二丸御殿は久々に主を迎えることとなる。文久元年12月に和宮が江戸城本丸大奥へ入ることが決まり、それにより本寿院が先んじて二丸へ引き移った。本寿院の引き移りに伴い万延元年(1860)から文久元年にかけて、二丸長局の修復工事が行われた。

文久3年11月15日に焼失した時は、本寿院と5人の側室が暮らしていた。慶応元年4月再建後の居住者については前章で詳述したので、ここでは割愛したい。二丸御殿の居住者を一覧にしたのが【表1】である。

将軍の住まいである本丸御殿とは異なり西丸や二丸はしばしば明け屋敷となることがあった。そのような時でも留守居と火之番は置かれており、主がいない時期でも二丸留守居や火之番は二丸に詰めていた。

【表1】

	前居住場所	居住期間		移り先・備考
家綱	本丸	寛永20年7月25日	慶安3年9月20日	西丸
家重（長福丸）		享保元年8月4日	享保10年6月19日	西丸
天英院	西丸	享保16年9月22日	寛保元年2月28日	死去
梅溪氏	西丸	寛保元年6月	延享4年4月16日	本丸、焼失
家重	本丸	宝暦10年5月13日	宝暦11年6月12日	死去
蓮光院	本丸	天明6年？	寛政3年3月8日？	死去
松平齊善	本丸	天保4年2月27日	天保6年9月25日	越前松平家
一橋慶昌	西丸	天保6年9月27日	天保8年8月11日	一橋邸
（家斉側室）	西丸	天保12年3月頃	文久3年11月15日	焼失
本寿院	本丸	文久元年9月25日	文久3年11月15日	清水邸、焼失
天璋院	清水邸	慶応元年4月29日	慶応3年12月23日	西丸、焼失
本寿院	清水邸	慶応元年5月3日	慶応3年12月23日	西丸、焼失
実成院	西丸	慶応2年12月14日	慶応3年12月23日	西丸、焼失

4. 現存する二丸図

従来、a「二丸御絵図」（国立公文書館183-834）は寛永20年（1643）に改築された御殿の平面図で、竹千代（家綱）が同年7月25日に移徙した時のものとされてきた。以前著者は「内藤昌氏の説に従い¹¹⁾その後の研究においても「御宮」があるという理由のみで明暦大火以前の図と推定されてきた。確かに「御宮」は描かれているが、その位置は御殿の北東部、池の脇に動いており、規模も前図に比べて大幅に縮小されている。また、西側の塀は一直線になっている。そして何よりも表向・大奥とも御殿が密集しており、大奥も御殿向と長局向が明確に分かれており長局が整然と並んでいる。本丸大奥でも述べたように、このような形になるのは早くて六代家宣以降であり、江戸前期のものとは考えがたい。」と指摘した¹²⁾。

a図を寛永20年とするのに不自然な点は他にもある。まず、本丸や西丸の例から全体図が作成される（現存している）のは新造の時であり、部分改築では作成されていない。次に、人が住まいに合わせるのではなく、住む人によって御殿の形を変えるのが江戸時代の特徴であり、寛永18年に生まれたわずか2歳の家綱には多くの家臣や女中は付いておらず、このように充実した長局や役人の詰所等が必要だったとは考えられない。さらに、幼少の男子は大奥住まいであり、主が女性の場合と同じ造りで構わず、中奥や表を充実させる必要はない。

今回、年代推定をする上で、表向に老中3人、御側御用人、若年寄5人の詰所があることに着目した。老中を従えているということから、世子か大御所が御殿の主となった時期の図面といえる。2章よりこれに該当するのは家綱の世子時代か家重の大御所時代かどちらかといえる。

次に「御側御用人」という役職に着目した。側用人が正式に置かれたのは9代家重の時、その役

職にはじめて就いたのが大岡忠光であり、柳沢吉保のことを一般には側用人と呼ぶが、当時そのよう¹³⁾な役職があったわけではなく將軍側近と表すべきであると、福留真紀氏は述べている。しかし、『江戸幕府役職武鑑編年集成』を確認すると、貞享4年より御側御用人の記載がみられ（前年にはない）、柳沢吉保も元禄5年（1692）には同職に就いている。もちろん、武鑑は民間書肆が刊行したもので誤りもある出版物で、幕府の公式記録ではない。この検証は後日に譲るとしても、家綱期に側用人がいなかったのは明白である。

従って、この図面は家重が大御所として移徙した時、宝暦10年（1760）5月13日に新造された時の二丸御殿図であると考えるのが妥当といえる。

よってa図を模写したと思われる「江戸城 二丸図 明治17年模写」（国立公文書館蔵177-340）および「江戸御城二ノ丸惣御殿向之図」（国立公文書館183-711）も宝暦10年図となる。

おわりに

本稿の執筆に当たり、新出の江戸城二丸図の探索に努めたが、結局断片的なものしか見つけることができなかった。本丸御殿の図面は諸大名家にもあることから、旧大名家の史料を所蔵する機関の目録を検索したが発見には至らなかった。しかし、3章を執筆した後、大名は二丸に登城する機会ほとんどないので、二丸御殿図は大名家には必要ないことに気が付いた。二丸留守居を勤めた旗本の家に残っている可能性はあるが、旗本の史料は散逸していてそれも難しい状況にある。

3章で考察したように二丸御殿が新造された（一から建てられた）のは、寛永13年6月21日、宝暦10年5月13日、慶応元年4月29日の3回のみである。本稿で「元治度二丸御表大奥共総切絵図」の確認と考察がなされ、従来寛永20年改築時の図面とされてきたものを宝暦10年5月新造の図面と改めたことにより、3回の二丸御殿新造図が揃ったことになる。

二丸御殿は10代家治生母お幸が居住した後、將軍生母（將軍世子生母）の住まいとしての性格を濃厚にする。江戸城に入らなかった家斉生母お富と慶喜生母貞芳院（徳川齊昭夫人）を除けば、家基生母蓮光院、家定生母本寿院、家茂生母実成院が居住しており、家慶生母お楽もその可能性を残している。

家斉・家慶・家定（家祥）の三御所が揃っていて、本丸・西丸共に窮屈な状態になっていても、家定の二丸移徙の史料は管見に入らなかった。嘉永5年（1852）に西丸御殿が焼失した後、家定は二丸に逗留¹⁴⁾している。逗留は仮住いであり、従って完全な形での居住はなかったと捉えられる。家定が二丸御殿に住まなかった理由としては、この時期の二丸御殿が世子の住まいとしての位置づけでなかったこと、家慶が家定の身の安全のため手元から離さなかったことが考えられる。

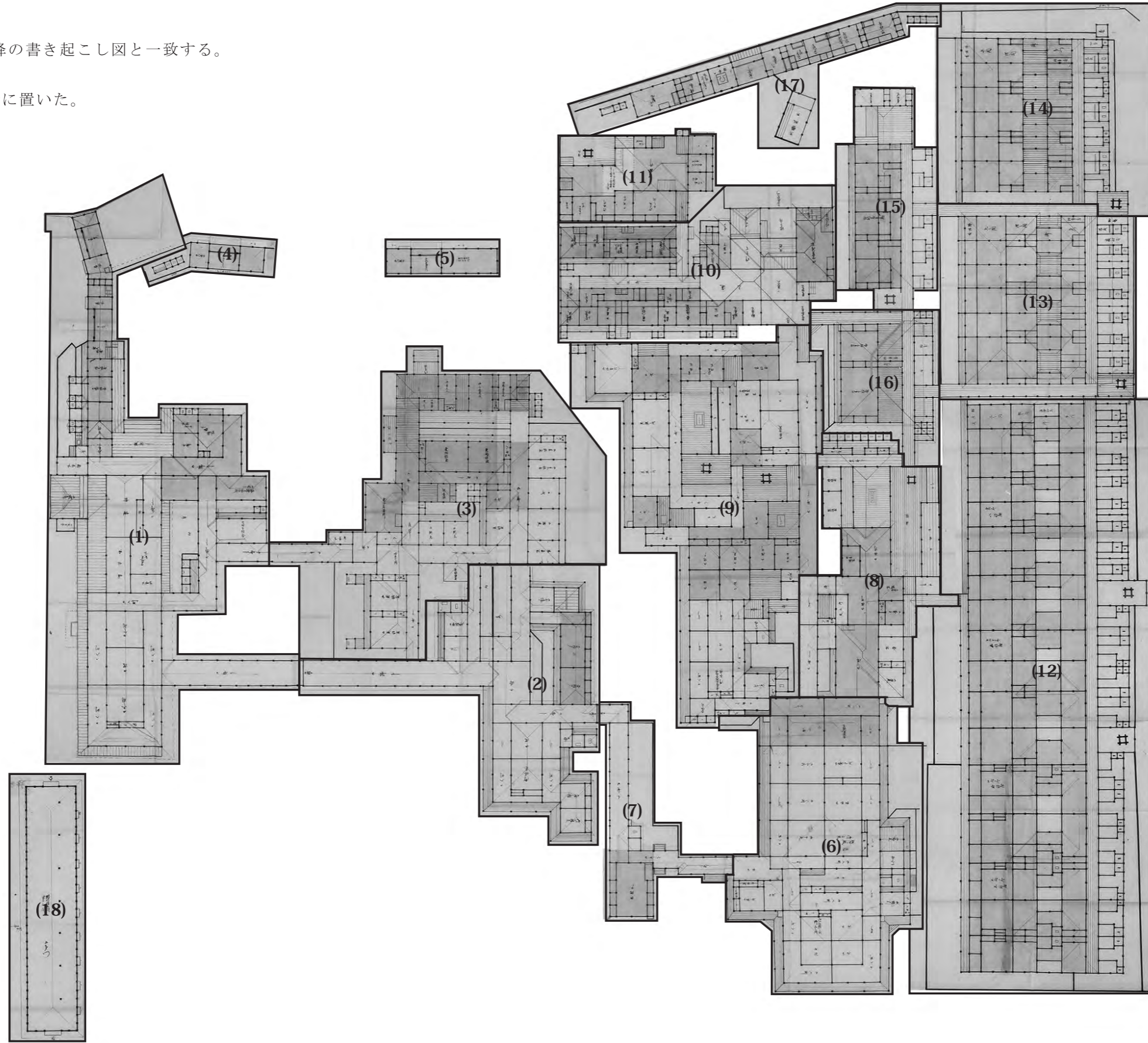
本稿で特に典拠を示さなかった箇所は、『東京市史稿 皇城編』を参考とした。

【註】

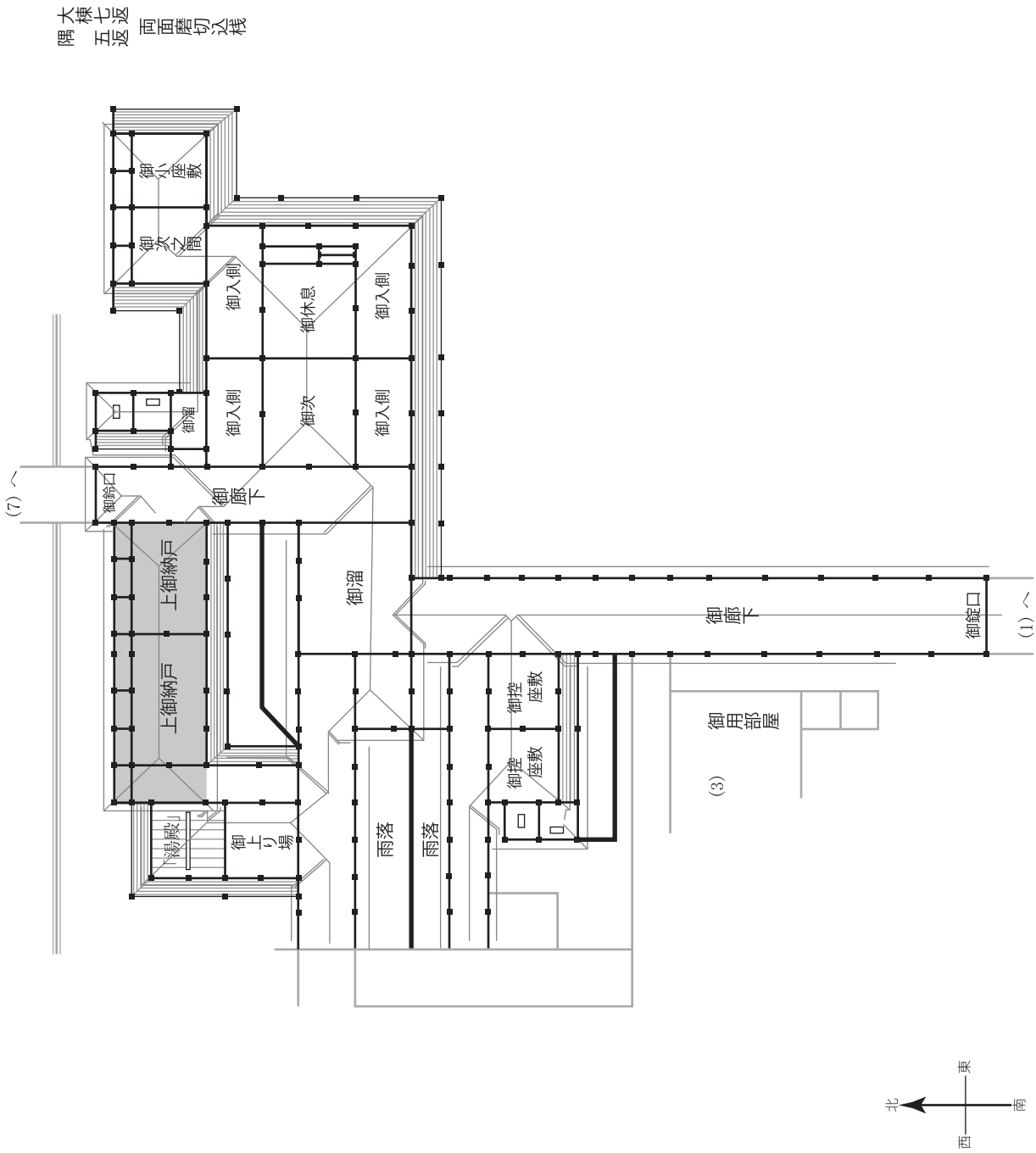
- 1) 畑尚子『幕末の大奥 天璋院と薩摩藩』岩波新書、2007年
- 2) 深井雅海『江戸城一本丸御殿と幕府政治』中公新書、2008年
- 3) 畑尚子「大名屋敷図にみる中奥について」『日本歴史』第765号、2011年
- 4) 畑尚子「大奥御年寄瀧山日記」『國史學』第206・208・207号、2012年
- 5) 氏家幹人『江戸の女の底力』世界文化社、2004年
- 6) 「東武日記」『日本都市生活史料集成 2（三都篇 2）』学習研究社、1977年
- 7) 長倉信祐「篤姫の信仰と小野嶋の実像 御台所と薩摩藩老女の横顔」『別冊歴史読本 天璋院篤姫ガイドブック』806号、2008年
- 8) 「実成院様二の丸御移りに付方災除四方守に付 花川宛高野伊予正書状」萩島家文書 八王子市郷土資料館蔵
- 9) 『茨城県立歴史館史料叢書17 一橋徳川家文書 覚了院様御実録 2』茨城県立歴史館、2014年
- 10) 高澤憲治『松平定信政権と寛政改革』清文堂、2008年
- 11) 平井聖監修『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城 I（城郭）』至文堂、1992年
- 12) 畑尚子『徳川政権下の大奥と奥女中』岩波書店、2009年
- 13) 福留真紀『将軍側近柳沢吉保 (家定) いかにして悪名はつくられたか』新潮新書、2011年
- 14) 「藤波書状郁三郎宛」（「西御丸様来月二日に二の御丸へ御逗留と昨日仰出被成候」）野口家文書 個人蔵

区分図

- (1)～(18)の数字は、次ページ以降の書き起こし図と一致する。
- (図面の向きは異なる場合がある)
- (4)(5)(18)の3図は推定される所に置いた。

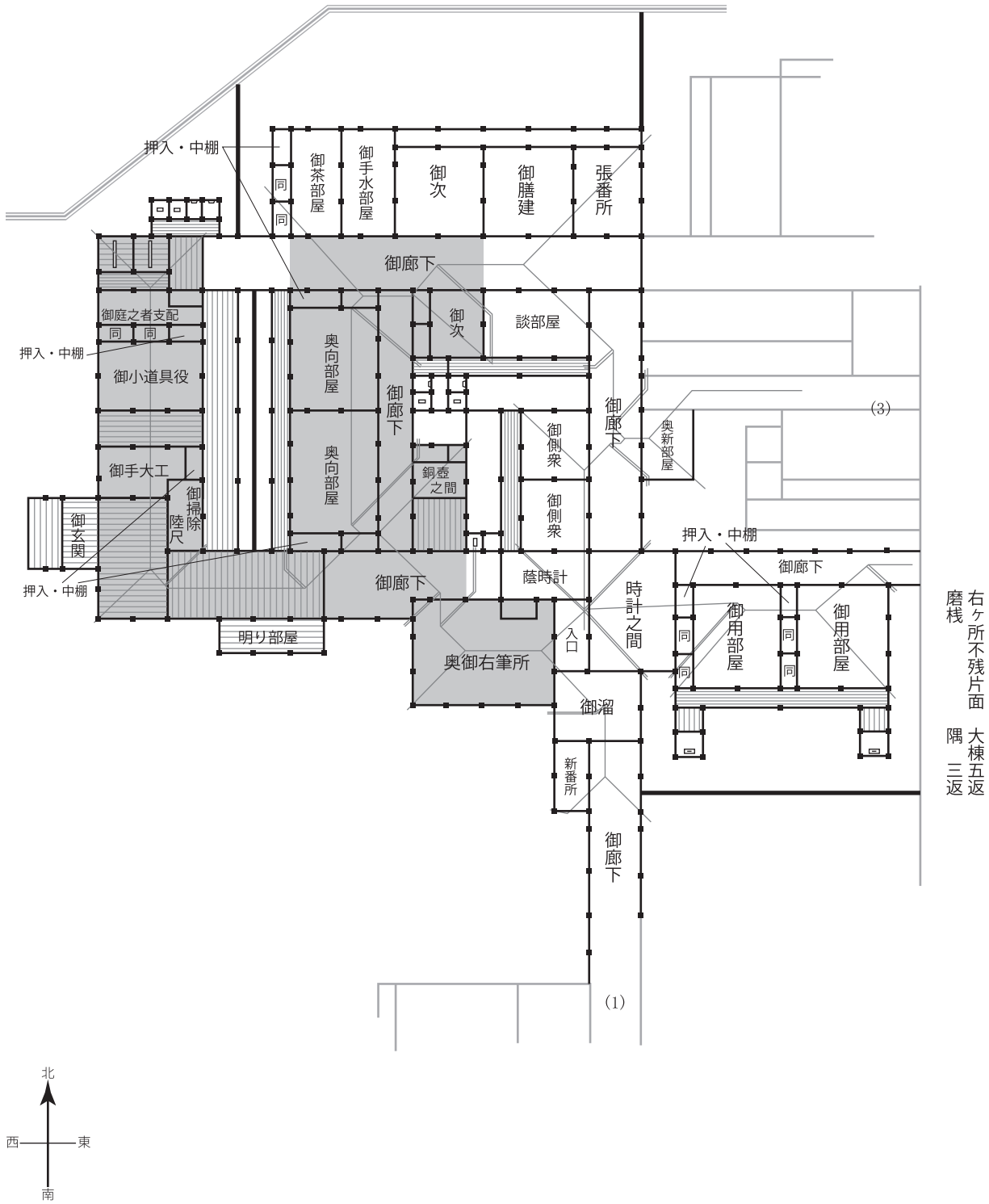


(2) 中奥御休息御小座敷向絵図

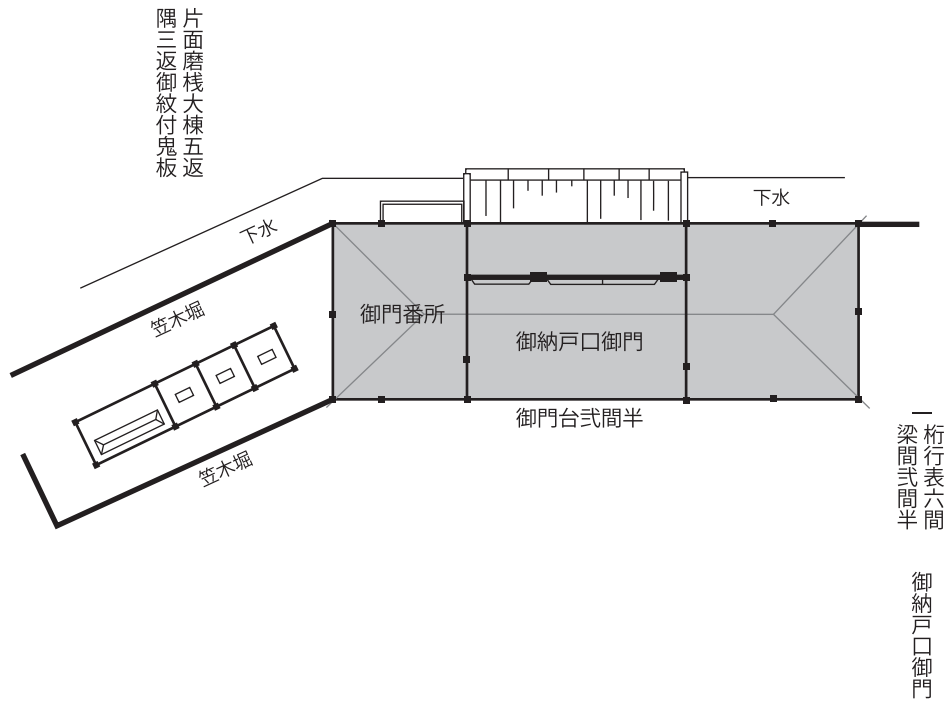


大棟七返 面面磨切入棧
 隅五返

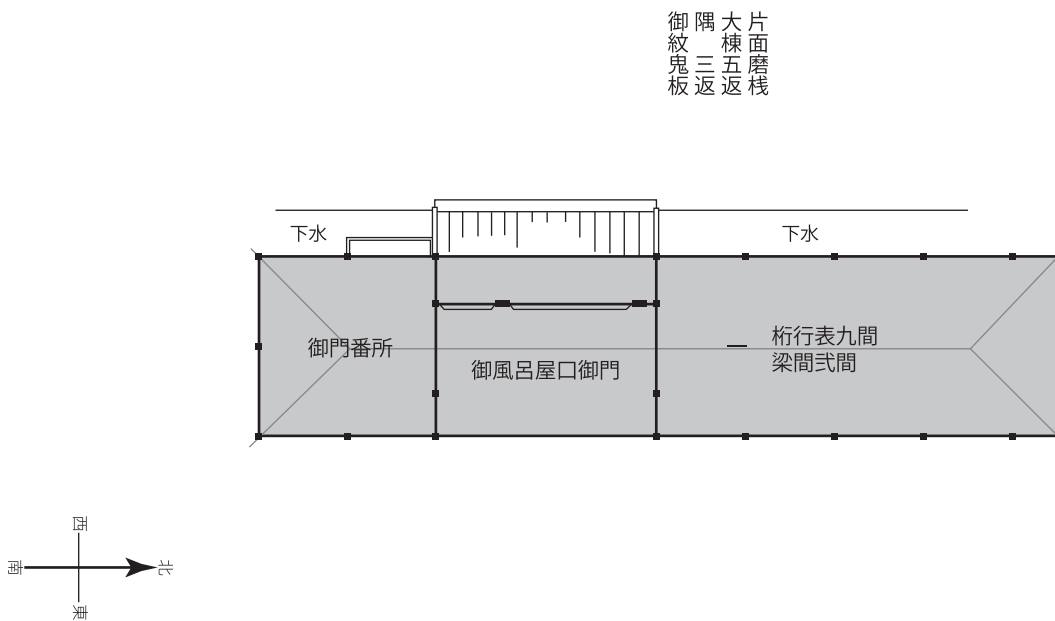
(3) 中奥御次向部屋々之絵図



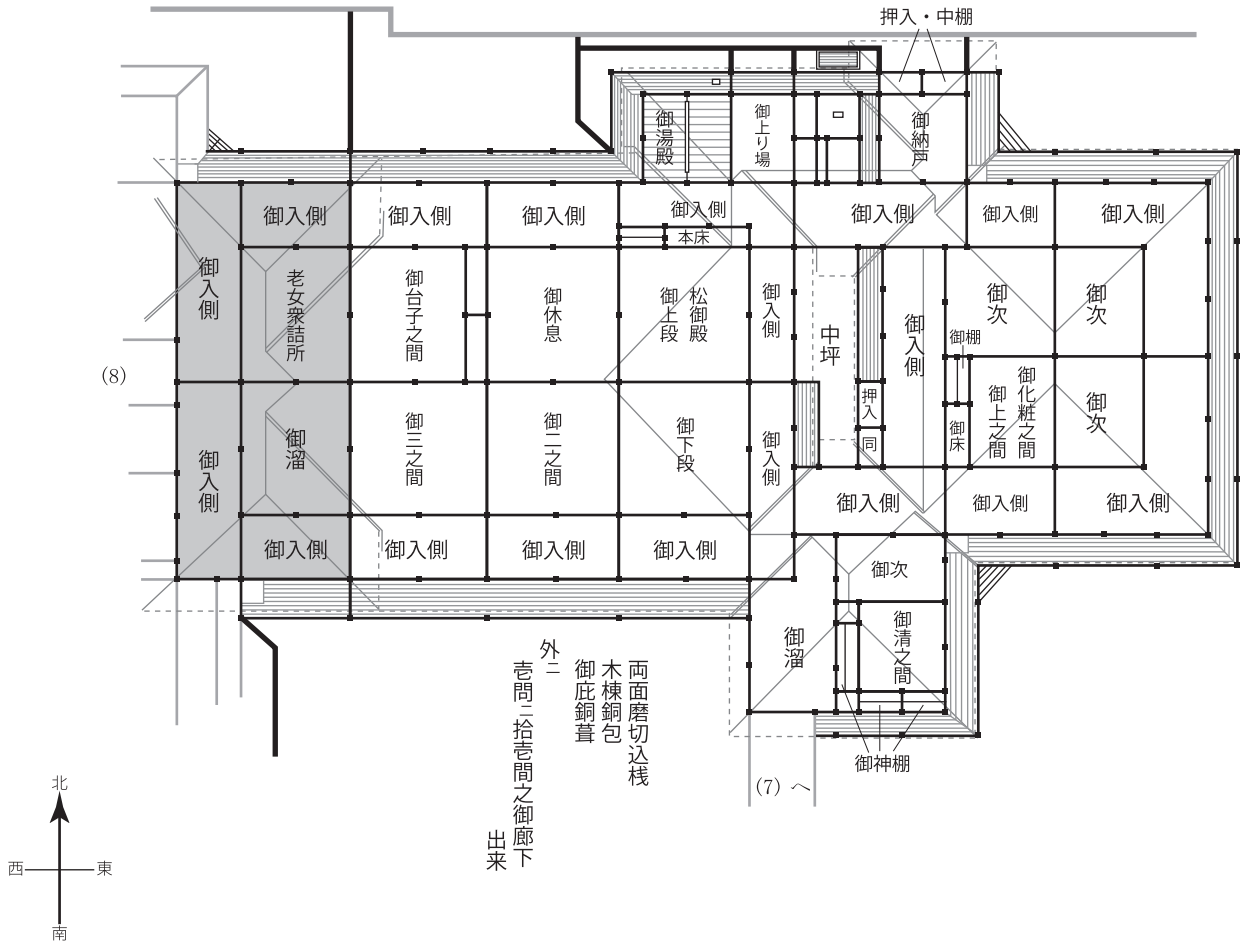
(4) 御納戸口御門絵図



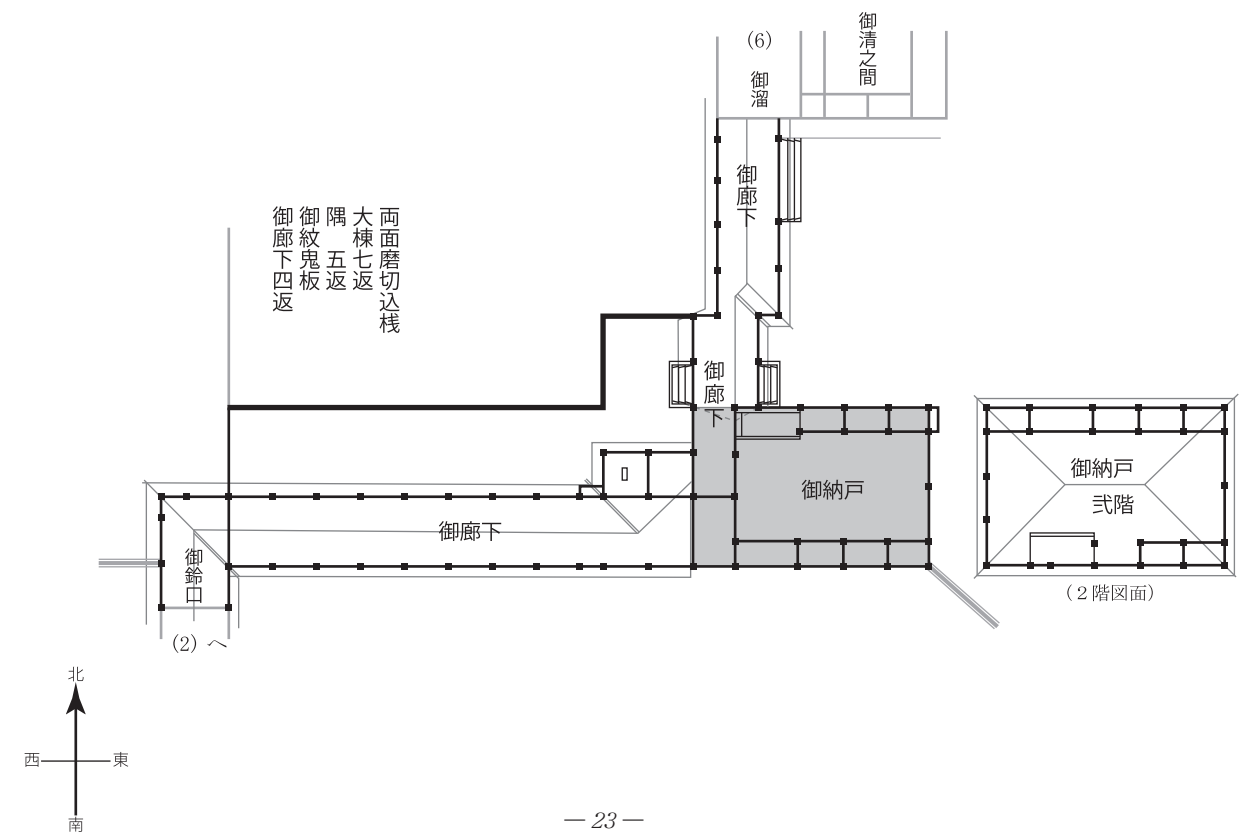
(5) 御風呂屋口御門絵図



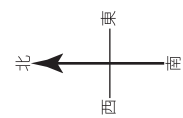
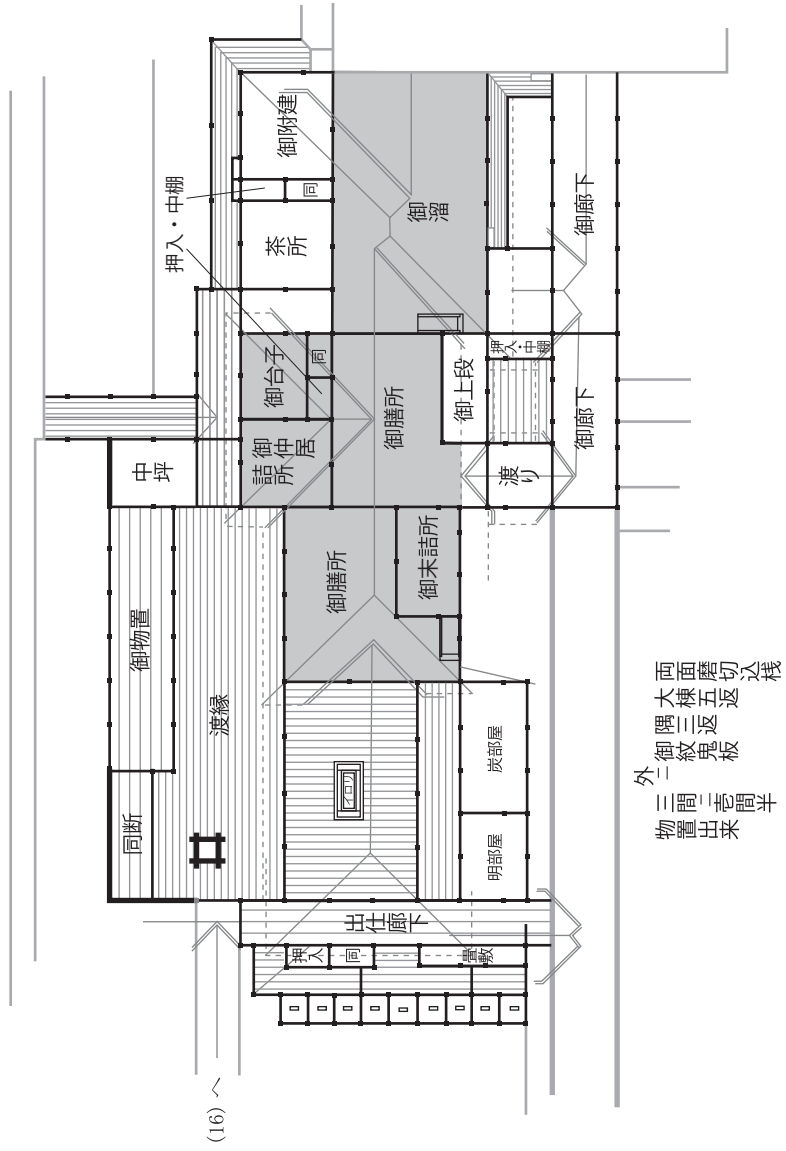
(6) 松御殿御化粧之間絵図



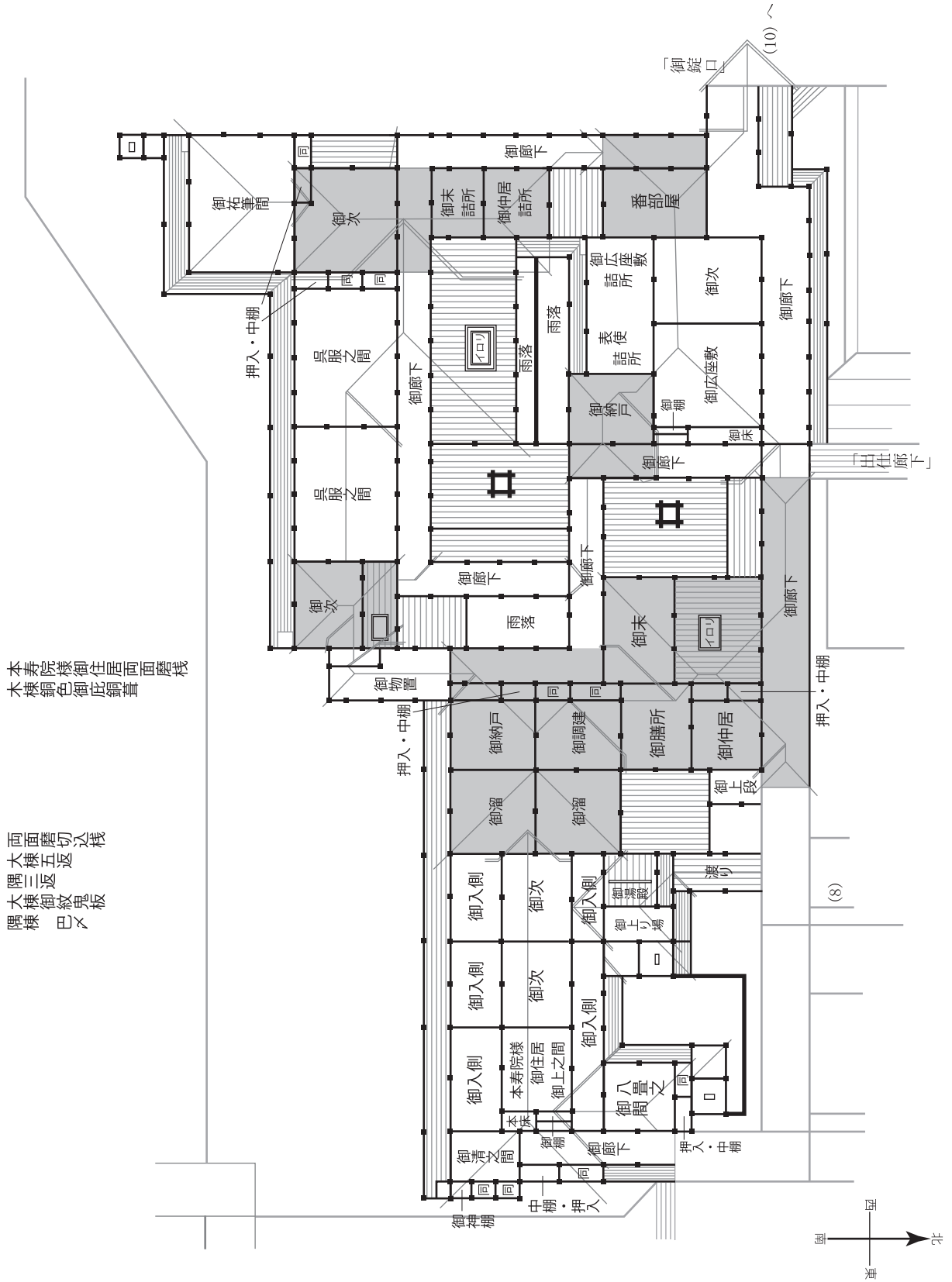
(7) 御鈴口御納戸向絵図



(8) 松御殿御膳所絵図



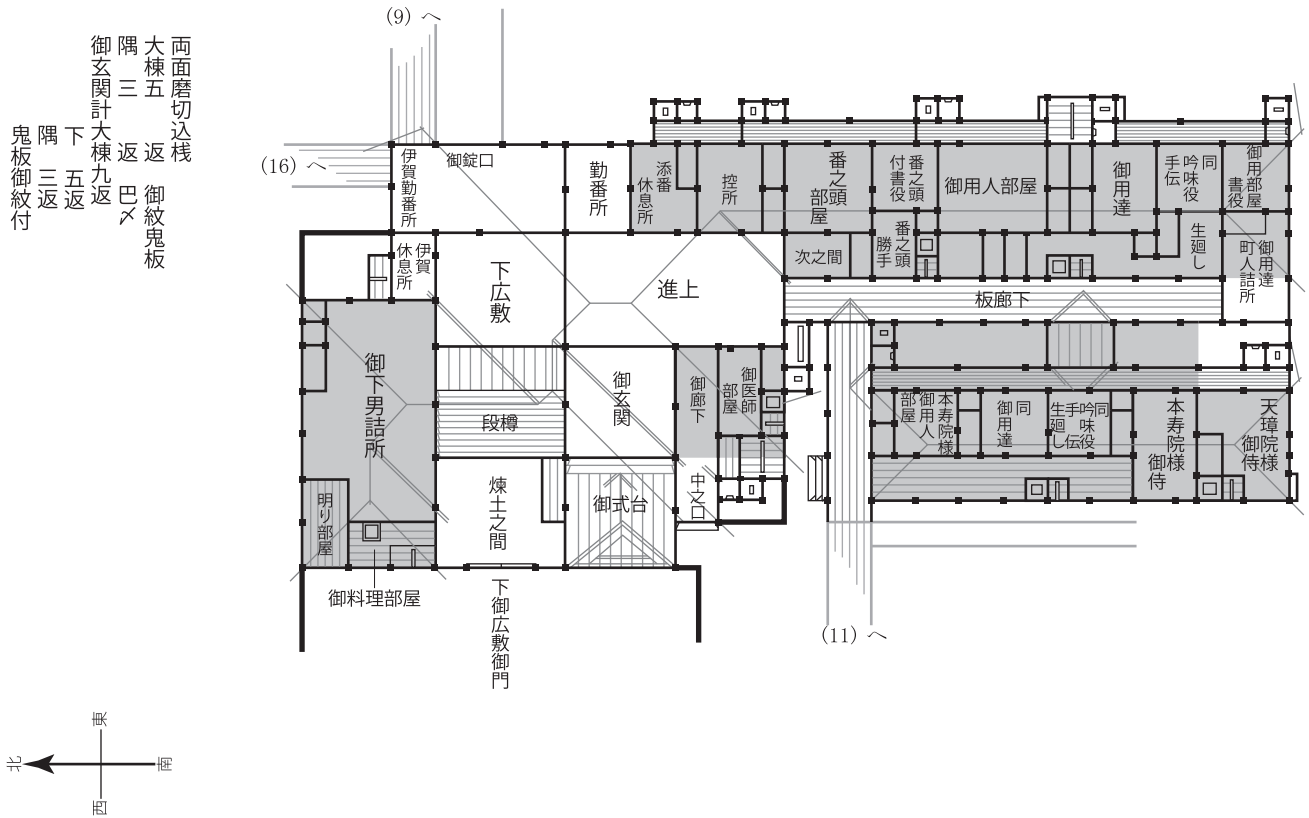
御祐筆間
 (9) 本寿院様御住居呉服之間絵図
 御広座鋪



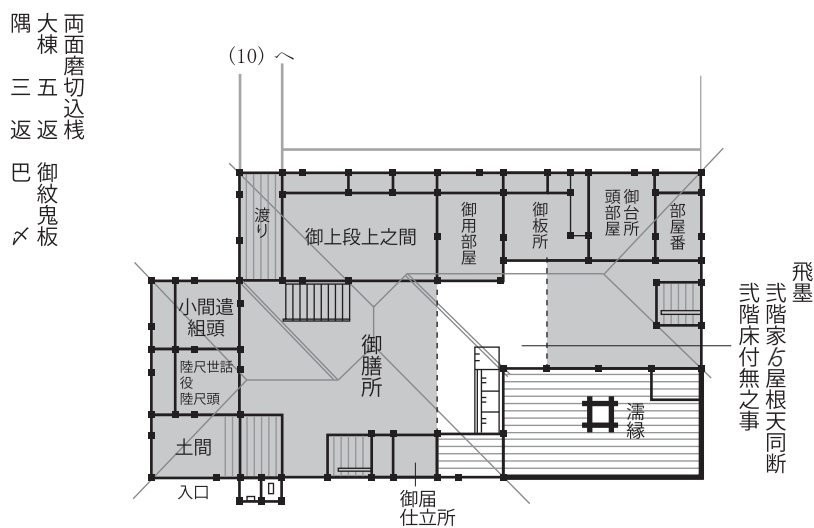
本寿院様御住居面磨棧
 木棟銅色御庇銅葺

両面磨切込棧
 大棟五返
 隅三返
 大棟御紋鬼板
 棟巴

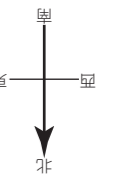
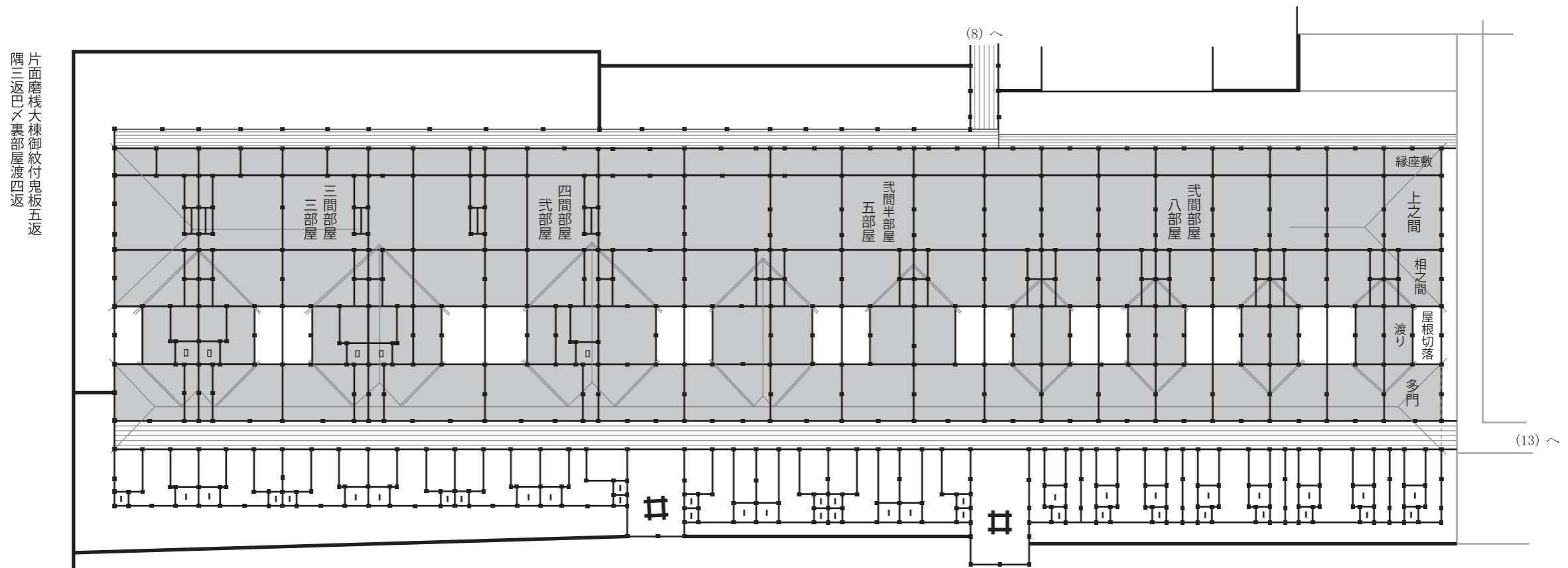
(10) 御広敷御玄関并部屋之絵図



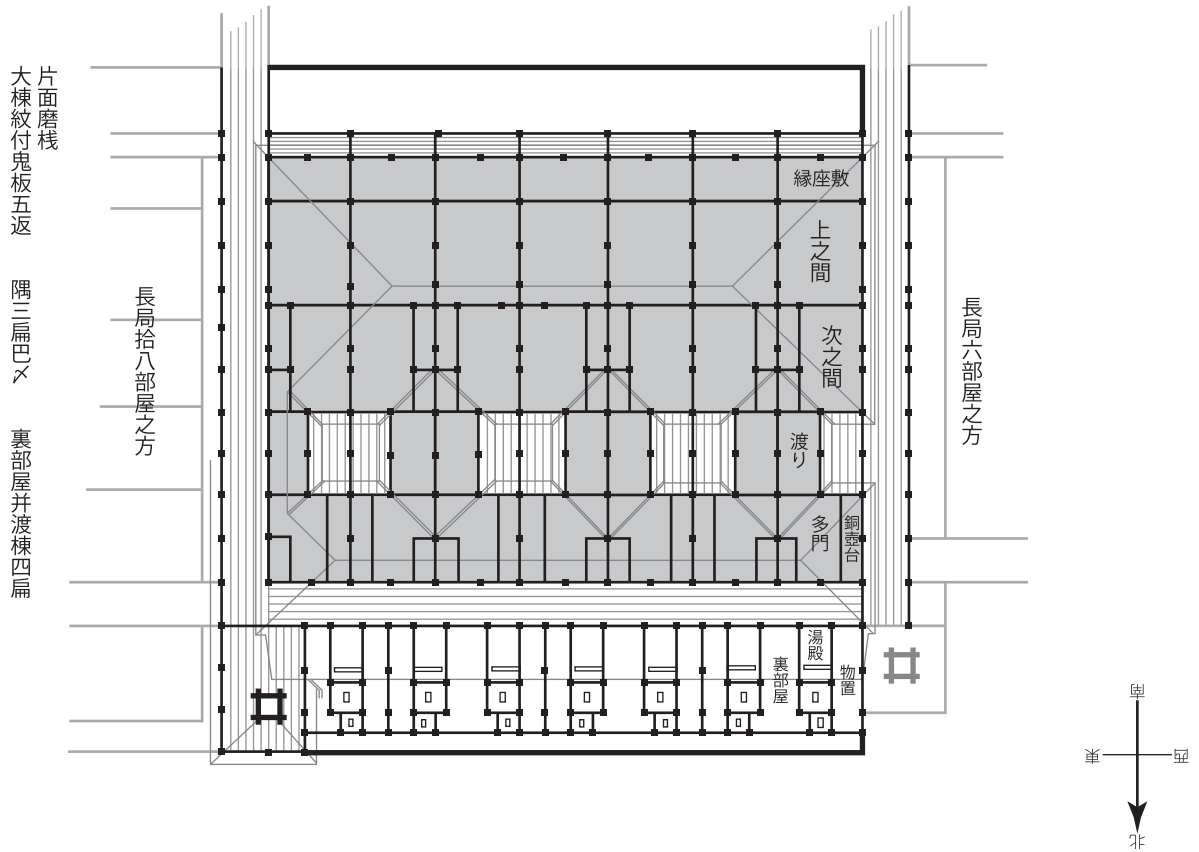
(11) 表御膳所絵図



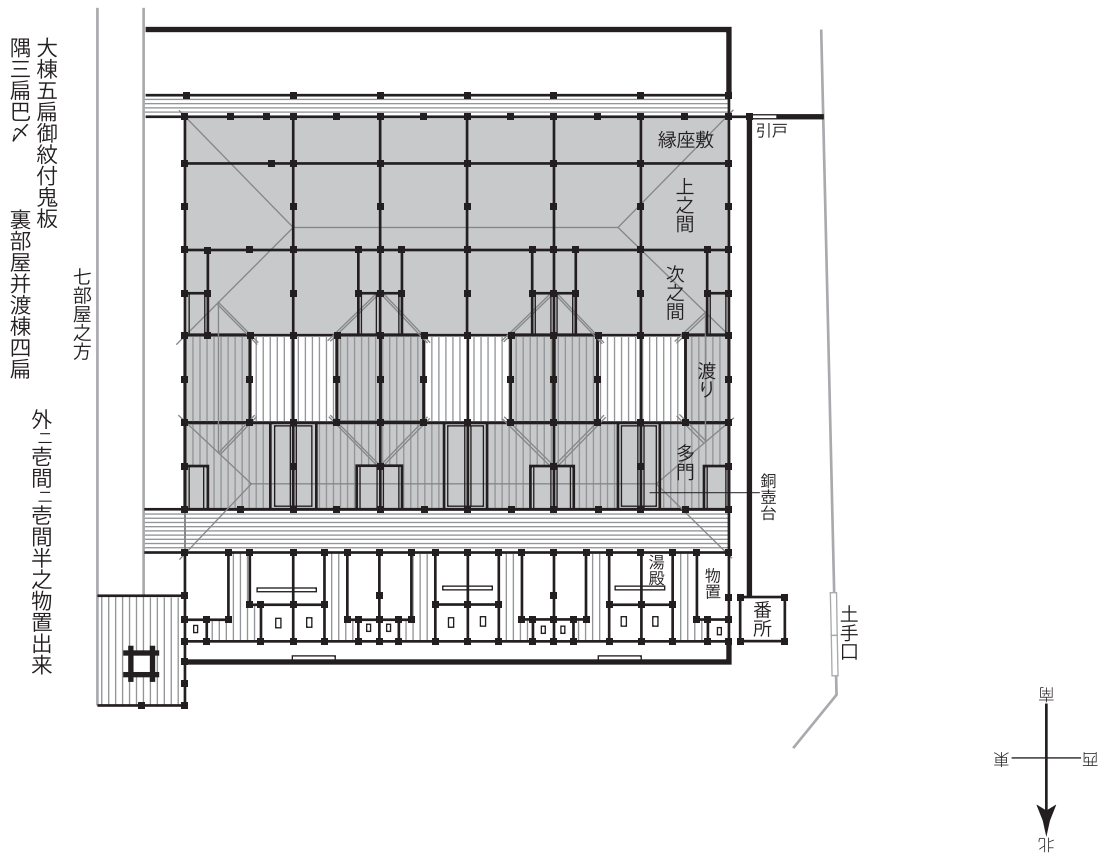
(12) 拾八部屋長局絵図



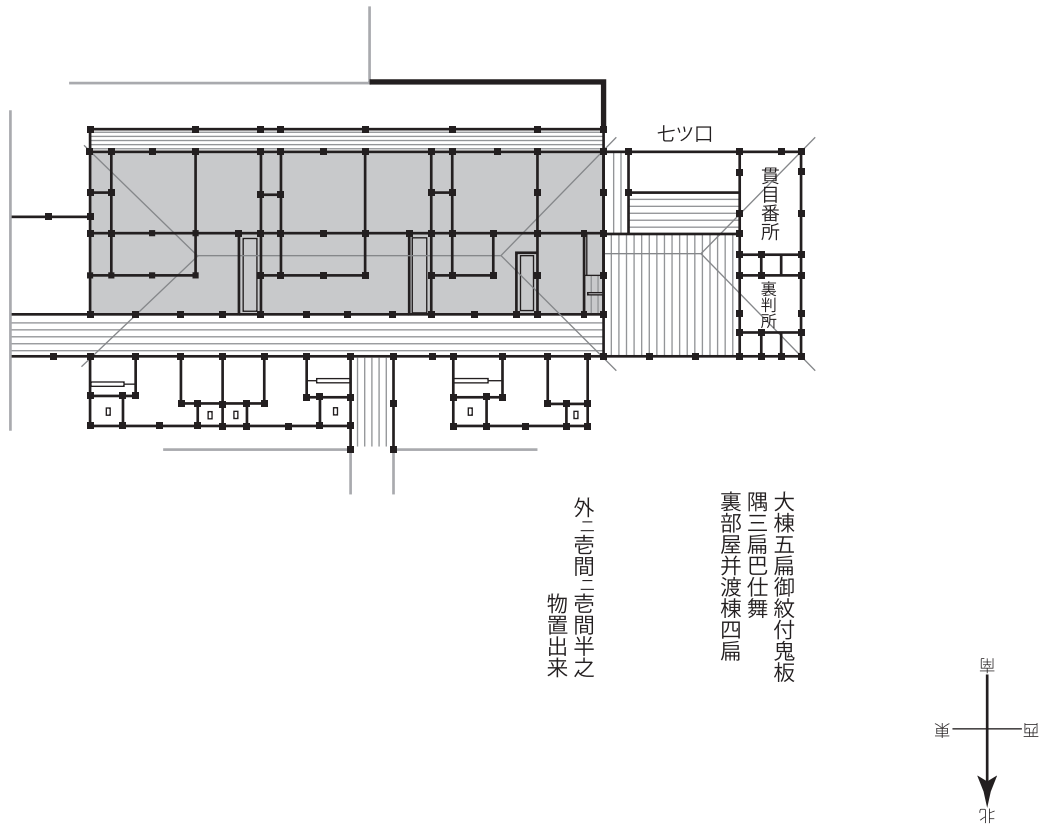
(13) 七部屋長局絵図



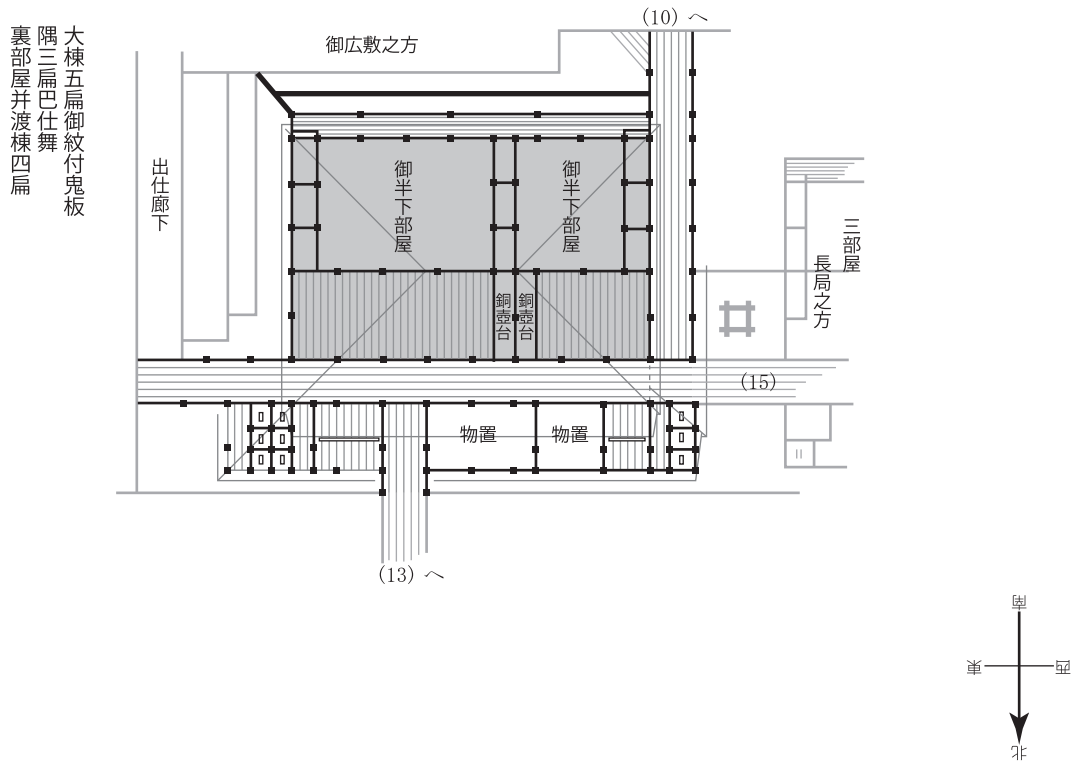
(14) 六部屋長局絵図



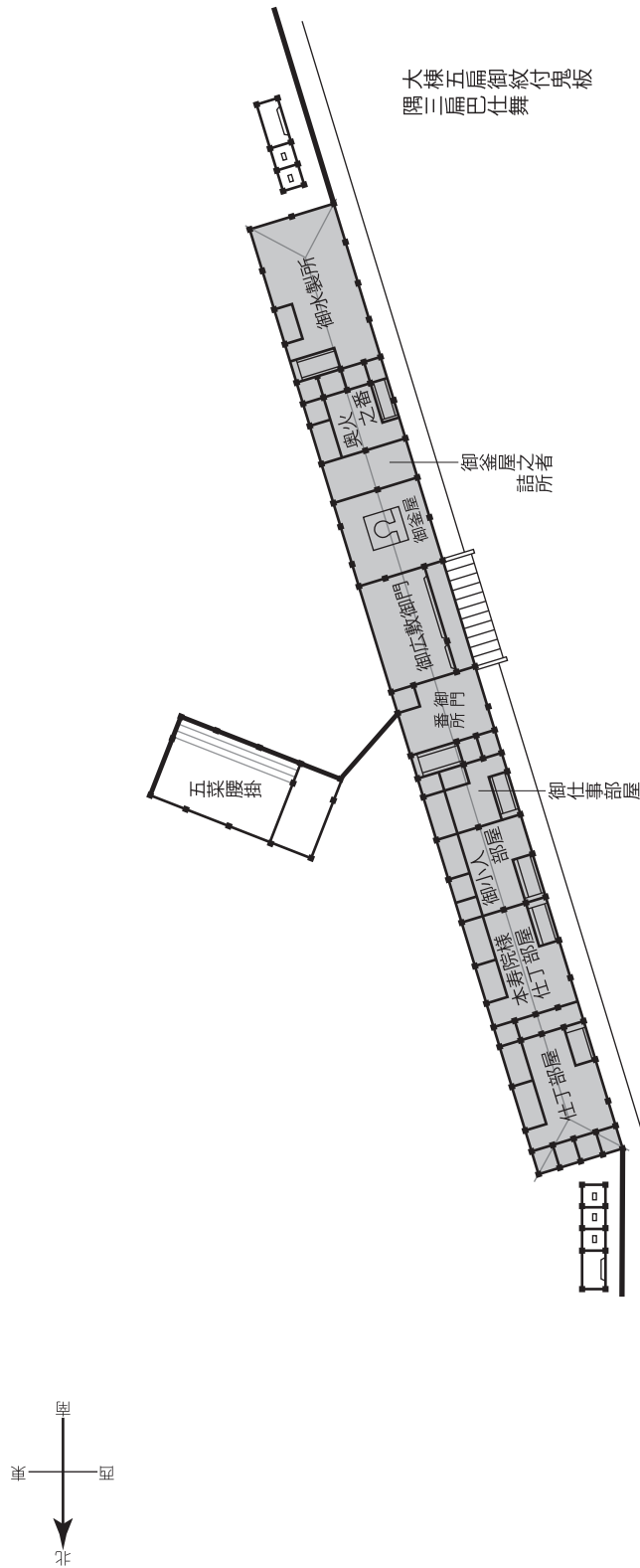
(15) 三部屋長局絵図



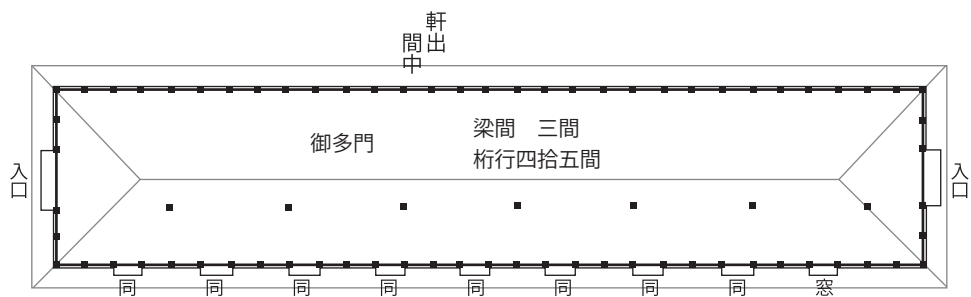
(16) 御半下部屋絵図



(17) 御広鋪御長屋五菜腰掛絵図



(18) 御多門造御土蔵絵図



凡例

- 1 本図は東京都江戸東京博物館所蔵「元治度二丸御表大奥共総切絵図」を書き起こし翻刻したものである。
- 2 図面のサイズは原図の縮尺通りとした。
- 3 図面の向きは原則建築に関する書き込みの向きに合わせた。(7)図は(6)図の向きに合わせた。
- 4 文字の向きは図面の向きに合わせた。
- 5 方角を示す記号を入れた。
- 6 図面中に出て来るひらがなは適宜漢字に改めた。
- 7 文字の記載のないものも一部「」で補った。
- 8 明朝書体の文字は著者の注記である。
- 9 原図でピンク色になっている所はグレーで、朱線は薄い線で示した。

・書き起こし図は岸本絢子が作成した。

・翻刻においては都市歴史研究室池田敬子より助言をいただいた。